

研究ノート

ショーロホフ『人間の運命』と
ソ連庶民の平和

木 村 崇

戦争がおしまいになったら、それだけでもう平和になったとっていい
のか？

それでもやっぱり平和なのか？ 平和が訪ずれた？ じゃあ、いったいこの
どうしようもないむなしさは何なのだ。乗り越えることなど、とうていで
きそうに思えない、この絶望の壁はなぜなくなってくれないのだ。

あえて描写すればたとえばこうなるような内面的状況を持った人間の意
識には、これほどクッキリとコトバに分節化され、論理に組み立てなおさ
れた世界認識を遂行する能力はほとんど失なわれているはずである。それ
はまだ漠然とした、とりとめのない虚脱感と、いらだちと、怒りとのない
まぜになった‘混沌’としてあるに相違ない。国家は、まるで国民の総意
や、総感情を体現するものであるかのようにふるまって、勝利を謳歌し、
苦難に満ちた戦争の経過を美しく記録し、再建とか復興とかいった、次の
全国民的課題に向けて、かまびすしい号令をかけてくる。自分の内面状況
と、自分が置かれている状況の間のこのギャップは、彼の（彼女の、でも
よい）‘混沌’を深めるばかりである。

歴史や政治学と文学との違いは、ひとりひとりの、くり返しのきかない、
死臭ただよう体験を、国家と同じ視座から総括するか、個人の‘混沌’を
解きほぐして、多くのものたちにも共感され理解されるようなかたちに作
りなおしてやるか、という点にある。だから、戦争の、あるいは平和の文
学は、けっして戦争と平和の歴史や政治学には還元できないものを記して
いるのである。

戦争の行為主体である国家にとって、平和とは、戦争のない状態以上の

何ものでもない。国家は、階級抑圧の機関の対外的機能として戦争を行なうのである。だからその代表者たちが、どれほど饒舌に「平和」を呼びかけあおうとも、それは、自分の側にとって不利な勝争を回避するための手口にすぎない。「平和」のために、いや、正しくは、戦争が起きないように状態を作りだすために、相手の攻撃能力を抑え込めるだけの核兵器を持つ、という倒錯した論理がまかり通るのも、国家ならではの事なのである。ここ数十年にわたって人類の恐怖の的であり続けてきた熱核戦争の脅威、軍備予算増大のあおりによる社会生活の圧迫感、強化された警察国家的機能のもたらす窒息感、こういったものに対して国家の「代行」者は何の痛痒も覚えはしない。戦争になっていない以上、彼らにしてみれば、これはすでに立派な「平和」なのである。

こんな消極的平和は退けよう。国家の論理に根ざしては本来の平和つまり積極的平和は、けっしてイメージできないと覚悟しよう。では、どうすればいい、積極的平和は得られるのか。すでに感知されているように、積極的平和は個人もしくは個人群の生きる実感の中から形づくられるものである。だからそのイメージは一様ではない。消極的平和の無味乾燥な一義性に対して、これは何と豊かであろうか。人間が本来実現しなければならなかった平和とは、それらすべてを包括できるような最大限の平和なのだ。ぼくらは、「核抑止力」などというまやかしの理屈を抑え込むためにも、この〈最大限の平和〉のイメージを膨らませなくてはならない。

すべての戦争文学が平和の文学であったわけではない。せいぜい反戦文学にとどまるものが多いのは事実である。反戦というだけでは、ぼくらのいう〈平和〉からはほど遠いのである。ところで、ミハイル・ショロホフの『人間の運命』を、ここでいう〈平和〉のイメージを展開した小説だと解説した評論や研究はあまりなかった。ところがこの作品は、〈積極的平和〉を文学的テーマに据えているのである。この研究ノートでは、そういった問題意識で作品に光をあてなおしてみたい。

1

短編小説『人間の運命』《Судьба человека》は、1956年12月31日と翌年の元旦号の『プラウダ』紙に前後に分けて掲載され、発表直後からたいへんな反響をよんだということである。終戦の翌年のこととして描かれた出来事、つまり10年も前のことをあつかった小説であったにもかかわらず、読者に強烈な共時的感動を与えたのは、ひとつにはソビエト市民に戦争の記憶が生なましく残っていたこと——それは戦後40年を経た今もなおそうである——、さらには、戦後おびただしい数にのぼる「独ソ戦もの」が書かれたけれど、読者の内面的な体験に共鳴するものが少なかった、という理由による。

これは、アンドレイ・ソコロフという、1900年生まれの子がとつとつと語る、自分の運命についての物語りである。かれの話しによれば両親と妹は、革命とそれにつづいた内戦で餓死したのであった。富農のもとで農夫をやったあと、かれは大工になり、ついで金属仕上工という工場労働者になって、やはり孤児出身の女性と結婚する。一男二女をもうけると、好きな酒も断つほどまじめな暮らしをするようになり、1929年からはトラックの運転手になって昼夜を分たず働く。やがてそまつだが、家を新築できるまでになった。息子のできもよかった。ところがドイツ軍の侵入の2日目に召集がかかり、主人公はとり乱す妻と子供たちを残して出征する。ウクライナの戦線では退却につぐ退却という大苦戦であった。三度目の負傷のとき、かれはドイツ軍の捕虜になってしまう。

強制労働の補虜生活は、つねに死と背中あわせの日々だった。若くて小心な党員小隊長を、密告してやると脅す男が許せず、かわってそいつを絞め殺した。収容所長の前で、銃殺の宣告にもひるまず、ロシア風の豪快な飲みっぷりを披露したために、九死に一生を得たこともあった。脱走に成功して戻ってみると、飛行場のそばにあったために家は爆撃を受け、妻とふたりの娘は死んでいた。しかし砲兵隊の大尉になっていた息子と連絡がとれ、ベルリンでの再会を夢みながら戦いつづける。それなのに彼に届い

たのは、勝利の日の朝に息子が戦死したという知らせだった。

死体となった息子に再会したあと、動員が解除になり、友人のところに身を寄せ、再びトラック運転手になる。家族の追憶に苦しみ、酒をまたやるようになった。食堂のそばに小さな浮浪児がうろついていて、露命をつないでいた。ある日ソコロフはその子をトラックに乗せてやった。あれこれ話しかけているうちに、かれはその孤児を引き取って暮してみようという決心をする。自分がその子の父だと名乗ると、孤児はいきなり首にしがみついてきてキスの雨を降らせた。かれは本当に父が現われたと信じたのであった。

小説は、新しい土地で働くために子連れで徒歩の旅をしているソコロフと、偶然に出会った「私」が聞き役になって引き出した、一種の告白のかたちをとっている。ショーロフ選集の解説によれば、それは1946年の春、作者が実際に体験した出会いだったらしい。¹⁾ ここでひとつの疑念がよぎる。ショーロフが当時、共産党地区委員会でこの解説者がいうように、『『このことを短編小説に書きます、かならず書きますよ』』²⁾ と言っていたとしたら、発表までの空白の10年間は、いったい何を意味するのであろう。

梗概からも明らかなように、この小説のあつかっているテーマは、優に長編小説のそれに匹敵する。しかし、そのために時間がかかったとは思われない。ショーロフははじめから「短編」を書くと言明していたのだし、また、実際に書き始めると、7日間で一気に書き上げたといわれている。³⁾

「無葛藤理論」(«теория» бесконфликтности) がはびこっていたためだという説明は、いちおう説得的である。1940年代の後半から50年代のはじめにかけては、悲劇的な内容のものはソ連芸術にふさはしくないとみなされたという。⁴⁾ したがって、たとえ書かれたにしても、発表の場を奪われたであろうから、筆がとれなかったというのは、いちおうの説明ではある。1946年にアンドレイ・プラトーノフが『帰郷』(«Возвращение»)を発表し、夫婦のそれぞれに起った「あやまち」のテーマを前面に押し出した時、この切実な問題提起を受けとめる文化的素地は、スターリニズム体

制下のソ連にはなかった。それはけっして退廃的でも悲劇的でもなく、むしろ家族の絆をたよりに、〈許しあう〉ことによって人間的復興を実現することを主張した積極的な作品だったのにである。復員したものが戦後をどう生きるかというテーマをトヴァルドフスキーが提起し、物語詩『道ばたの家』（Дом у дороги）を書いたのも1946年であった。その後のソ連の10年は、文学的に不毛な期間である。もちろん、この間に、作品の発表について、ソ連の作家や詩人が、どれほどの屈辱を強いられていたかということは周知の通りである。ショーロホフという、若くして名声を博した大作家にしても、基本的には同じことで、スターリン＝ジダーノフ的政治・文化状況のもとで『人間の運命』のような作品を書く気になれなかったのは、十分に考えうることである。

同時にまた、『人間の運命』に含まれる〈積極的平和〉の思想（このことについては次章以下で触れる）が、熟成の時間を必要としたからだとも考えることも可能ではなかろうか。この小説の事件の筋は、1942年の『憎悪の会得』（Наука ненависти）と基本的に重なり、その延長線上にある。だから、時流に受け入れられる程度に——ショーロホフにそれが出来たか、また実際に受け入れられたかは別の話として——技術的解決をはかることはできたはずである。問題は、すでに体験ずみの〈運命〉の紹介よりも、主人公にこのあとどのように生きる可能性が与えられているかを、作品の細部にわたって考える必要をショーロホフが感じた、というところにあったと見るのが妥当であろう。

2

ある意味では戦後は戦中よりも苛酷な時期である。勝利はしたものの、ソ連は荒廃した国土と想像を絶する人的損失という条件のもとで、生き残ったものたちが、とにかく生活を開始しなければならなかった。ないない尽しの中で生産活動を行なうのがいかに困難であったかは、たとえばチンギス・アイトマートフの『さらば、グリサルィ！』（«Прощай, Гульсары!»）に見る通りである。一方で、この国運のかかった未曾有の大戦争に

おける勝利は、スターリンの個人崇拜を狂的なまでに増長させた。さらに悪いことに、アメリカ合衆国との間に冷戦が始まって、世界は米・ソを頂点とする東西ブロックに分かれて軍拡競争に突入し、国際的緊張は高まる一方となった。作家たちは、英雄的大祖国防衛戦争勝利の讃歌以外のものを書くことをはばかった。讃歌は、はじめからおしまいまで、徹底して明るいものでなければならず、したがって効果を考えての転調ですら、糾弾を覚悟しなければならなかった。こういう讃歌がソ連においてショーヴィニズムの色濃い「愛国的」零囲気を助長したであろうことは想像に難くない。そしてそのことが、本人たちの意図はともかく、東西の緊張の悪化を促進する結果になったのは明らかである。

『人間の運命』はそういう状況が、1953年のスターリンの死によって、何か変化しそうな兆しの現われた時期に発表されたのである。ボリス・パステルナークが『ドクトル・ジバゴ』(«Доктор Живаго»)を発表してみようと思ったのも、この頃である。もちろん、これらの作品自体に何かの共通性があるわけではない。ただ作家たちが色めき出した時期であるということを行っているのである。かれらに先んじて、イリヤ・エレンブルグが『雪どけ』(«Оттепель»)を発表し、作品名がソ連の歴史のうえで希有な一時期を象徴したことも、よくこの頃の零囲気を表わしているであろう。ソ連の為政者から激烈な非難を浴びたВ・ドゥージンツェフの『パンのみにて生きるにあらず』(«Не хлебом единым»)が発表されたのも1956年であった。

『人間の運命』は、1956年のソ連という、特殊な状況のもとで、そのことを明らかに考慮して書かれた作品として読むべきではないだろうか。時代設定が1946年であり、主人公が、いわゆる〈ロシア的性格〉(русский характер)の典型であるということに目を奪われてはいけなない。ソ連の研究者は多くの場合、このことを忘れがちである。Ф. ビリュコフはアンドレイ・ソコロフがロシア文学の伝統の中に連綿と生起する形象の系譜に位置付けてこう言う。「アンドレイ・ソコロフはその運命からいえば、短編小説『憎しみの教訓』に登場するゲラーシモフに誰よりも近い。しかし『人

間の運命』のほうが内容が大きく、複雑で、壮重だ。人生のためのたたかいで不撓不屈の精神を発揮し、天性の度量の広さ、連帯精神を発揮するといったこれらの資質は伝統的にはスヴォーロフ大元帥時代の兵士からでてきており、レーンモントフは『ボロジノ』でそれらを賛美し、ゴーゴリは『ターラス・ブーリバ』で賛美し、レフ・トルストイはそれらに感嘆しているが、それらの資質がアンドレイ・ソコロフにもあるのである。⁵⁾ このこと自体は誤りではない。しかしそれが、「ところがかれば、西側の『失われた世代』の主人公たちとはまったくかけはなれた存在である。レマルクやヘミングウェイの主人公たちの信念のなさ、ペシミズム、暗く懐疑的な態度にたいして楽観的な物の考え方が対立している。なにはともあれ、もっとも不幸なるソコロフの運命とは、正義の事業のための犠牲であるからだ⁶⁾ という「国家の論理」とショーヴィニスティックな価値観をむき出しにした飛躍した解釈につながっていくところに、この見方の一面性がひそんでいるのである。ソコロフを「楽観主義者」であるかのように持ち上げ、かれの運命を「正義の事業のための犠牲」という「美名」のもとに祭り上げようとするビリュコフの恣意に走った読み方は、ショーロホフが執筆の動機としてひそかにいっていた意図とは、明らかに矛盾する。ソコロフが「楽観主義者」からどれほど遠いかということは——だからといってペシミストであるというのではない——、たとえば彼の酒の飲み方によっても分かるはずである。ヴァーニカを養育しようと決意したあとも、死んだ家族たちを夢に見て苦しむ主人公を、「楽観主義者」に仕立てるのは、いかにも粗雑な読み方だ。

A・パーヴロフスキーも、「国家の論理」で〈ロシア的性格〉を裁断しようとする点では共通している。「ソビエトの現実によって培われた資質と一体になった固有のロシア的特質は、ショーロホフの主人公（アンドレイ・ソコロフ——木村）の中に見事な合金を作り出し、それは戦火にあって分離しなかったばかりか、ダイヤモンドのように堅固な硬度を得たのであった⁷⁾」と絶讃するこの論者には、ソコロフがヴァニューシカを育ててやろうと決意することによって、じつは彼自身も絶望から這い出るきっかけ

をつかんだという、小説ではいちばん大事なところを読み落してしまうのである。パーブロフスキーにいわせれば、「彼〔ソコロフ——木村〕はヴァニューシカをたんに養子にしてやったのではない。彼は、自分のことも、自分の行為から起こりうる結果もよく考えずに、『即座に』、その子を『救い出し』、孤児で飢え、無保護の状態にあったその小さな生活から『戦争の血の跡』を洗い落してやったのである」⁸⁾ということになる。しかし、ソコロフのこのとっさの判断は、生涯に二度も家族をのこらず失なったという不幸から、もう一度這い上がろうとした自分の無意識の欲求から出たものなのだ。酒びたりの孤独から主人公を救ったのは、むしろヴァニューシカだったのである。ソコロフのロシア的性格に英雄的な献身性しか認めないような読みは、破綻せざるをえない。ショーロホフは小説のしめくくりで、「私」すなわち作者自身の形象を借りて、二人から受けた印象をこういつている。「肉親のいなくなってしまったふたりの人間、空前の猛威をふるった戦争の嵐が異郷の地に呼び寄せたふた粒の砂……前途に彼らを待ち受けるものは何か？」⁹⁾ ソコロフは、「不屈の英雄」といった平板な形象ではない。

3

第1次世界大戦から社会主義革命へ、内戦と戦時共産主義から一転してネップへ。やがて第1次5カ年計画が始まり、工業が急速に発展。しかし農村は疲弊の極に達し、それに強制的な集団化が追い打ちをかける。富農撲滅運動、粛清の嵐、それに次ぐヒットラー・ドイツの侵入。主人公アンドレイ・ソコロフがもの心ついた時から応召までの間に見たロシア・ソ連は政治的激変の連続する社会であり、その変化のうねりが人々の運命を翻弄したのであった。激変のたびにあらゆるスローガンが飛び交い、「思想」が氾濫し、めまぐるしく交替し、人びとは自分の言動のひとつひとつに明日の運命が左右されることを身にしみて知った。歴史上、これに匹敵するような『政治の時代』はまれであろう。

不思議なことに、ソコロフのことばには、この時代に生きた人間に特有の『政治臭』がまるでない。家族や身近のものに対する愛情はあふれるほ

どあっても、祖国だとか党だとかに対してどれほどの「愛情」をいだいているかは、さっぱり分からない。かれは、自分の運命に決定的な影響を与えてきた〈政治〉に対して、無知なのか無関心なのか無視しているのか、いずれにせよどこか醒めた態度に徹しているのである。したがって『ロシア・ソビエト文学史』の、担当部分の筆者がソコロフの人間形成について、「ソ連社会によって育かれた人間というものは、幾多の困難な試練の重みに、屈服することもなければ弱腰になることもない。かえってその不撓不屈の性格は鍛えられ、その明晰な理性のくもることはおろか、精神世界がすさむとか無情になるとかいうこともない……」¹⁰⁾と強調しているのが、的はずれに聞こえてならない。

ショーロホフのしたたかさがうかがえるのは、公式的、図式的な読み方をする文学官僚や批評家に、「殺し文句」をちゃんと用意しているところである。前章のおわりに引用した作品の結末部には、すぐあとに次のような印象記が続いている。「わたしは思いたい——不屈の意志を持ったあのロシア男子はきっと耐え抜いてくれるだろう、そしてその父の庇護のもとであの子は成長し、成人すれば、祖国が呼びかけるや、いかなることにも耐え、行く手に立ちはだかるいかなることをも克服できるようになるだろうと」。¹¹⁾これはあくまでも「私」の、つまりショーロホフの考えであって、ソコロフ自身が、そういう決意や自信のほどを語ったわけではないのである。もちろん作者自身の、本当の主張は、作品全体が語るものであって、けっしてその一部にすぎない「作者のことば」や「叙情的逸脱」ではない。ショーロホフは、官製の「愛国思想」や戦争の「正義論」からは自由なソ連の庶民を描くために、こういうたくみな作品構成を考え出したのである。

アンドレイ・ソコロフの運命は祖国の運命の激変に左右され続けてきた。かれは与えられた条件の中で精一杯やってきたし、そのかぎりでは幸福も手に入れることができた。しかし、かれはいちども、既成の大義名分のために自己を犠牲にしたことはない。かれが不屈で、あくなき奮闘ぶりを見せるのは、自分の論理で理解でき、納得の行く目的があるからである。

味方の弾丸が尽きかけた時、かれは自動車隊の隊長に弾丸を満積したトラックで地雷原を突っ走って届けられるか、とたずねられる。かれにはそういう質問が心外だった。「話してる場合ではないです、駆け抜けなきゃならん、それだけでいいです」といったのは、けっして高邁な使命感によるものではない。窮地に陥っている仲間を目の前にした時の、とっさの、本能にも似た判断だったのである。

国家としてはソ連は勝利を獲得した。戦争が終結したという意味では平和が訪ずれた。しかし、ソコロフはそのために闘ったのであろうか。たしかにかれの行為はすべて、その目的に奉仕させられてはいる。しかし、すべての肉親を失なってひとり生きのびたかれにとって、それは勝利でも平和でもなかった。この疎外感ハソコロフをとことん打ちのめしたはずである。ショーロホフは、このような庶民の中に、自らの力で蘇える力を見て取っている。生きとし生けるものが豊かに交りあえる状況を自力で作り出していくこと、そこに蘇生の源泉を見出しているのである。小説が「足ばやの力づよい春」の描写から始まっているのは、ゆえないことではない。荒廃しているのは人間や人間社会であって、自然は暖い風でとかし出した雪水を小川にあふれさせ、氷を割りくだき、わきかえるような春の喜びをもたらしている。人類の歴史が始まるよりもはるか昔から繰り返えされてきたこの情景は、〈自然の論理〉に即して生きることの大切さを教えているかのようである。ヴァニューシカをひき取ったアンドレイ・ソコロフは、やがて息子の嫁に出会い、孫たちを見ることであろう。平和とは、そういった人間たちの間で自然にくりかえされる営みを可能にする状態のことなのである。理念やスローガンによって説得しなければ分らないような不自然なものではけっしてないはずである。ショーロホフは、ジダーノヴィズムに毒された、官製の愛国主義とソ連型ショーヴィニズムの嵐の吹きすさぶ風潮をくぐって、『人間の運命』というアンチテーゼを提示したのである。ただし、ショーロホフという作家の、公的機関での演説や行動様式は、かならずしも、ここに述べた線に沿ってはいない。アンドレイ・ソコロフとはちがって、若くして知的階層に入り込んでしまったショーロホフは、

もはやソ連の一庶民として生きるわけにはゆかず——かたくなに都会での生活をこぼみ、故郷の田舎にこもって創作活動を行なってはいたけれど——それなりの処世術を弄しなければならなかった。かれの作品は、そういう理解をしてかからないと、誤読してしまう危険性を多分に持っているのである。

『人間の運命』のテーマは、一見したところ、これ以上明白にはしがたいほど明白である。しかし、この研究ノートで指摘したように、よく読むと、全体に何か、「裏テーマ」とでも呼んでよいようなものがただよっている。おそらくそれは、作家自身の、『開かれた処女地』（«Поднятая целина»）の続編が困難をきわめたことや、『彼らは祖国のために戦えり』（«Они сражались за Родину»）の後半部が未完になったことに関連する、政治的状況と無関係ではないはずである。ショーロフのアンチ・テーゼは、この政治的状況と同一平面におけるそれではなかった。戦争と平和の問題を、ふつうの一個人の論理で問いなおしてみようという試みは、たんにアンチテーゼにとどまらずに、その後のソビエト文学の状況に大きな変化をもたらすきっかけを作ったのであった。当時の批評家たちは、この短篇小説の中に、大長編小説へ発展する契機を感じとっていたが、事態は逆の方向に進んだ。ショーロフ自身の中からは新しい作品は生まれなかったけれど、ソビエト文学は、その後、ソルジェニーツィンの『イワン・デニーソヴィッチの一日』（«Один день Ивана Денисовича»）という衝撃的な作品を得、かつて文学を裁断した政治的状況は、ここで逆の関係に陥れられ、政治を裁断する文学的状況が出現したのであった。ブレイジネフの時代の後半には、その再逆転の試みが執拗になされ、映画などの分野では英雄讃歌的「大作」が作られたが、もはやそれもソ連の文化・芸術における主流を生み出す力は失ったとみてよい。むしろラスプーチンの『生きよ、そして記憶せよ』（«Живи и помни!»）のような傾向の長編小説が書かれることのほうが、ふつうになったのであった。

これらの事態に対して『人間の運命』が文学史的な意味で源泉になっているかどうかは議論の余地があるが、少なくともさきがけではあった。ソ

ビエト文学において逆行現象をくい止める、何ほどかの‘歯どめ’となったこともまちがいない。ただ、現定の政治を〈積極的平和〉の方向に転換させえたかという問に対しては、残念ながら、否と答えざるをえない。文学の力とは、そんなものかもしれない。

注

- 1) См.: М. Шолохов. Собрание сочинений в 8-и томах, том VIII, «Художественная литература», М., 1960, стр. 370~371.
- 2) Там же, стр.371.
- 3) См., там же.
- 4) См.: А. И. Павловский, Русский характер (О герое рассказа М. Шолохова «Судьба человека»). —В кн.: Проблема характера в современной советской Литературе, изд-во Академии наук СССР, М.-Л., 1962, стр. 259.
- 5) F. Бирюков. Шолохов描く三つの戦争。(『ショロホフと現代』, F. Бирюков編, 秋山勝弘訳, 横田瑞穂監修, プログレス, モスクワ, 1983 所収)
- 6) Там же, стр. 271
- 7) А. И. Павловский. Русский характер (О герое рассказа М. Шолохова «Судьба человека»). —В кн.: Проблема характера в современной советской литературе, изд-во Академии наук СССР, М.-Л., 1962, стр. 271.
- 8) Там же, стр.286.
- 9) М. Шолохов. Собрание сочинений в 8-и томах том VIII, «Художественная литература», М., 1960, стр. 66.
- 10) История русской советской литературы в 4-х томах, Т. IV, «НАУКА» М., 1971, стр. 214.
- 11) М. Шолохов. Собрание сочинений в 8-и томах, том VIII, «Художественная литература», М., 1960, стр. 66~67.